



# 日乗連ニュース

## ALPA Japan NEWS

www.alpajapan.org

Date 2008.10.27

No. 32 - 20

発行: 日本乗員組合連絡会議・ALPA Japan  
幹事会  
〒144-0043  
東京都大田区羽田5 - 11 - 4  
フェニックスビル  
TEL.03-5705-2770  
FAX.03-5705-3274  
E-mail:office30@alpajapan.org

### 【シンポジウム開催報告】

## シンポジウムにマスコミ関係者含む63名が参加！！

### 基調講演・パネルディスカッションで参加者「目からウロコ」

#### 「パイロットの過労と航空安全」

#### ～パイロット労働条件と労災認定基準を考える～

#### 【経過】

日乗連は佐賀便機長の労災裁判に全面的取組を行ってきています。

その一環として10月4日に東京、水道橋の全通会館で「パイロットの過労と航空安全」～パイロット労働条件と労災認定基準を考える～と銘打ってシンポジウムを開催しました。

当日はマスコミ関係者4名を含み63名の参加者がありました。

シンポジウムは全日空乗員組合の奥平機長による司会進行により内容の濃いシンポジウムとなりました。

#### 【シンポジウム基調講演】

基調講演では、日乗連副議長、全日空エアバス吉村機長から「現状報告」として、我々「日本の乗員」と「世界の航空界」が置かれている現状、ICAOが検討中である飛行時間、飛行勤務時間、休養時間に関する「ANNEX6」の改訂並びにその補足「疲労リスク管理システムガイダンス」について話して頂きました。

次に佐賀便裁判の原告団弁護士である米倉先生より、佐賀便機長の労災問題に関して発生までの経緯、第一審判決の問題点、さらには高裁での勝利判決に向けての取組の紹介がありました。

既に本件発生から丸9年が経過しており、新たに乗員になられた方々にはご存じでない方もいらっしゃると思います。今後は機会ある毎に本件事象発生の経緯を含め、お知らせする予定です。

続いて労働科学研究所慢性疲労研究センター長、佐々木先生から「運航乗務員の労働条件と眠気・睡眠・過労死問題の本質」と題してお話しを頂きました。

「非常に興味深い」内容であり、乗員に留まらず不規則勤務（乗員は無規則勤務？）を行う者にとっては、勤務条件を考える上では無視して通ることは出来ない内容でした。



## 【パネルディスカッション】

シンポジウム後半はパネラーとして黒田 勲先生（ヒューマンファクター研究所長）、基調講演を行って頂いた、佐々木 司先生、大森 秀昭弁護士（JAL 客室乗務員労災裁判担当弁護士）及び野口 信二機長（日本航空機長組合 JAL 勤務裁判担当）の皆さんの参加によりパネルディスカッションを実施しました。

黒田先生から「乗員もやっと社会的な視点に立って、このようなシンポジウムを開催するようになった」と叱咤激励を頂くと共に、「乗員自らが航空安全確立の為社会的に情報を発信していく事が必要」と述べられています。

佐々木先生からは基調講演に引き続き「科学的見地からみた疲労と睡眠」についてお話がありました。「疲労は蓄積すると言うが、私は進展すると言っている」と興味深いお話と共に、「人間には寝たくても寝られない時間帯や、固有のサーカディアンリズムにより支配されていて、早朝勤務、深夜労働や長距離国際線による時差は大きなリスクである」と指摘されています。

大森弁護士からは「佐賀便一審判決では、皆さんの働き方は労使の協定内、航空法の制限内だから大丈夫と言っている。このままでは乗員の過労死はあり得ない。航空法を変えて下さい」と現状の問題点をズバツと指摘されています。

野口機長からは JAL の勤務裁判から得た経験をお話し頂くと共に「勝利判決」以降も、日本航空が判決を真摯に受け止めていない事の報告も頂きました。併せて基調講演を通して新たな発見もあったとし、今後も日本の乗員が声を上げていく必要性を訴えられています。

## 【参加者の声】

参加者の皆さんからアンケートの回答を頂きました。総じて皆さんの反応は「非常に良い勉強になった」「普段感じている事を科学的知見で説明を受け納得した」等シンポジウム開催の意義は達成されたと感じています。

## 【今後の課題】

準備期間の短さもあり、開催の周知が十分でなく参加者が幾分少なかった事は今後の課題として残りました。シンポジウムの内容は現場で働く私たちには「胸にスーと入ってくる」ものであっただけに、もっと多くの方々に参加頂ければ極めて有意義でかつ情報の共有化が図れたものと考えています。

## 【職場へのフォードバック】

現在シンポジウム内容を文書化すると共に、ビデオ撮影したものを皆さんにお届けする方法を検討しております。今後シリーズとしてニュース化も行っていますが、「ビジュアル世代」にはより効果的な方法も検討していきます。

まずは「シンポジウム開催報告」として皆様にお知らせ致します。

以上